

人生はひとつの社会彫刻である

プロローグ

この「僕」という「固有な意識の建造物」。存在と意識と言う代物を自分史として語るこのひとり演劇には、通過してきた時代の出来事が舞台背景としてカラージュされている。舞台上のひとりの役者の語るナラティヴは、その時代風景と渾然と溶け合うだろう。

カラージュされた断片には、半世紀前の文化状況が反映されている。

そこには、形而上学、ニヒリズム、アウトサイダー、実存主義、時代霊、学生運動、新左翼、全共闘、ノンセクト・ラジカル、ゲバリスタ、カウンターカルチャー、ビートニク、夭折、サイケデリック、ウッドストック、ヒッピー、フリーセックス、美学校、アナーキズム、カムイ伝、犯罪、暗黒舞踏、紅テント、フリージャズ、ロック、マリファナ、ラブ・アンド・ピース、LSD、オキナワ、遊郭、洗脳、コミュニケーション、テロリズムといったような、いまでは馴染みのない思想や政治、美術に文学

や映画や犯罪などなどの多彩な文化ジャンルに広がる言葉が、混在し散乱している。

それらはいわば僕の人生遍歴のコレクション。脳内の図書館や美術館や映画館のようなものである。あの時代を語るには時代劇風の立て込みが必要になるが、言葉もそのひとつだと思う。それらの言葉は当時の文化層を反映しているが、現在使われなくなった言葉も混じっているだろう。そのところはご容赦願いたい。

「エゴ・ドキュメント」は、歴史のもっている複雑系の位相に属している。この見解が学術的なものや一般論とズレているとしても、すべては僕の責任である。時代の流れのなかに刻まれた一本の人生の、それは確かな年輪なのである。

カラージュされた時代風景は、僕の言葉によるタブロー（絵画）であり、それらの言葉によって刻まれた僕の人生の年輪は、ドイツの現代美術家、ヨゼフ・ボイスがいうような、ひとつの「社会彫刻」であると考えている。

どのように六七―六九年の時代霊と遊んだか。それを『我が魂の航海術』として公開したいと思う。